

令和3年
5月28日

病害虫発生予報 6月号

茨城県病害虫防除所

農薬の誤飲に注意！農薬をペットボトル等に移し替えてはダメ！

～令和3年度茨城県農薬危害防止運動が始まります(6/15～9/14)～

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稻：縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	1
【防除所レポート】イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除適期の予測	1
水稻：ニカメイガ	2
○水稻のいもち病の防除について	2
ナシ：黒星病	3
ナシ：ナシヒメシンクイ（第二世代幼虫）	3
【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測	4
果樹共通：チャバネアオカメムシ	4
夏ネギ：黒斑病（葉枯病を含む）	5
○サツマイモ基腐病に注意しましょう④	6

【その他の病害虫】

水稻、ブドウ、半促成ピーマン、夏ネギ	7
【防除所レポート】小麦の赤かび病の発生状況と今後の対策について	8

II. 今月の気象予報 9

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel : 0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>
フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い～早い	多い	県西地域、 県南の一部地域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、県西地域、県南地域の小麦圃場におけるヒメトビウンカの10回振りすくい取り虫数は、本年を含む過去6年中最も多い。
- ② 5月28日現在、有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛日は、平年より4～6日早いと予測される。
- ③ 2～3月に採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫におけるイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、県西地域11地点中10地点、県南地域4地点中2地点で、5%以上の高い値であった。
(令和3年3月24日発表 令和2年度病害虫発生予察注意報第5号 参照)

[防除上注意すべき事項]

- ① 本病の発生が問題となる地域で、近年ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施用をしてもなお本病の発生が多かった水田や、本年育苗箱施用をしなかった水田等では、ヒメトビウンカを対象とした本田防除を行う。防除適期については下記の防除所レポートを参照する。
- ② 育苗箱施用と本田散布の体系防除を行う場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を選択する。
- ③ 5月中下旬に採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫について、今後イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率を調査し、6月中旬頃に病害虫防除所ホームページに結果を掲載する予定なので参考にする。

(令和3年5月25日発表 病害虫発生予察注意報第1号 参照)

防除所レポート [イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）の防除適期の予測]

- ① イネ縞葉枯病対策としてのヒメトビウンカの本田散布の防除適期は、ヒメトビウンカ第二世代幼虫の発生開始期から増加期（産卵最盛日から7日後までの間）である。
- ② 5月28日現在、有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛日は、平年より4～6日早いと予測される（表）。
なお、今後の気温の推移によっては、表に記載した産卵最盛日および防除適期は数日程度変わる可能性がある。

表 水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の予測産卵最盛日および予測防除適期*

アメダス地点	古河	下館	下妻	つくば	土浦	
予測産卵最盛日	本年	6/7	6/11	6/10	6/11	6/8
	平年値	6/11	6/16	6/14	6/16	6/14
予測防除適期	本年	6/7-14	6/11-18	6/10-17	6/11-18	6/8-15

*有効積算温度から予測した産卵最盛日（5月28日現在）。防除適期は、予測した産卵最盛期から7日後までの間。

なお、5/19に気象庁の気象データ平年値が更新されたことにより、本表記載のアメダスの5月第6半旬～6月第3半旬の平均気温が更新前より約0.5℃高くなったため、今後の気温が、更新前の平年値より0.5℃高く推移した場合の予測を示した。

(水稲 続き)

水 稲

2. ニカメイガ

[予報内容]

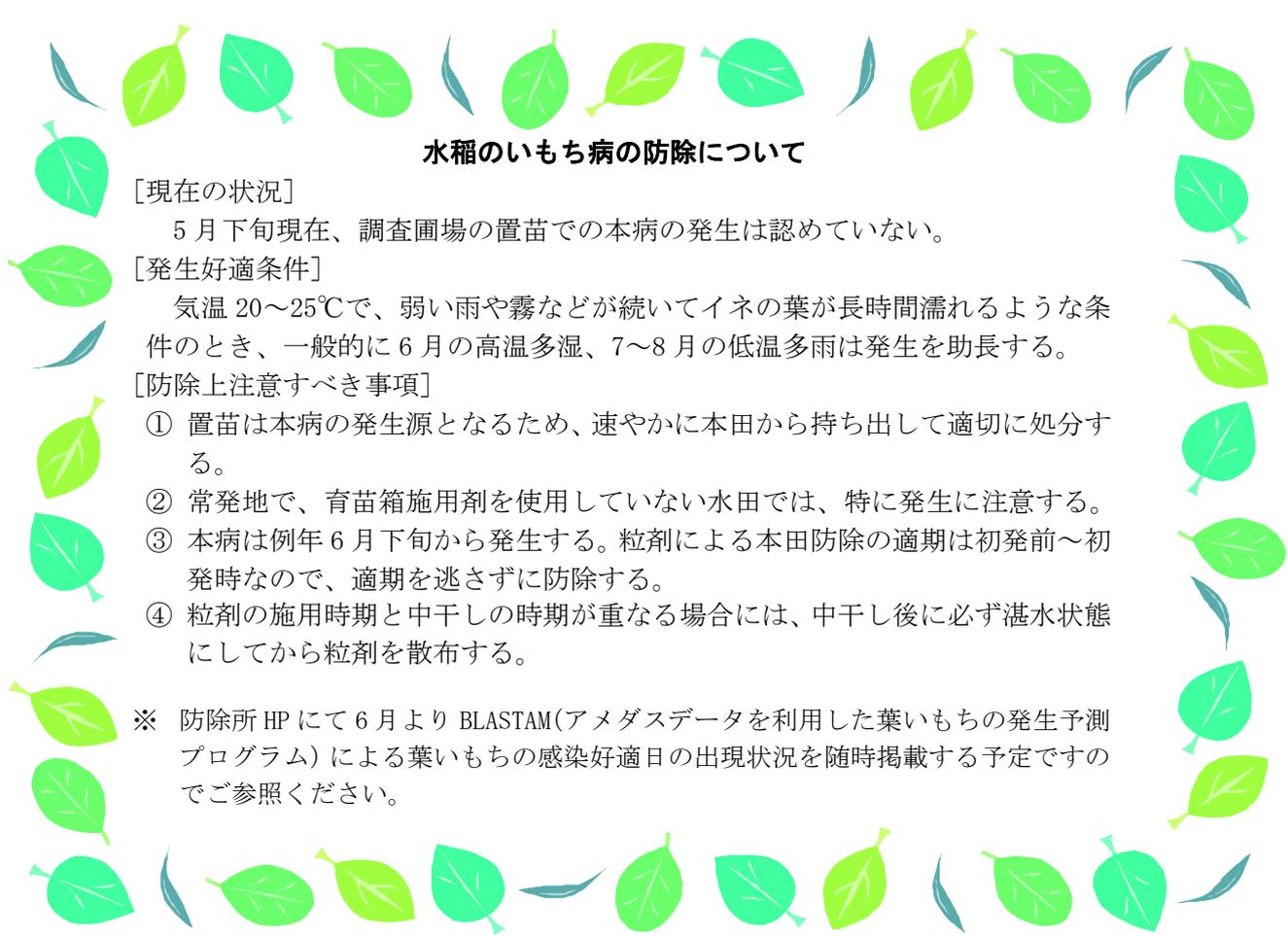
発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① フェロモントラップへの誘殺時期は、龍ヶ崎市で平年並である。
- ② 5月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 例年発生が目立つ水田では、6月上旬に第一世代幼虫を対象とした薬剤防除を実施する。



水稲のいもち病の防除について

[現在の状況]

5月下旬現在、調査圃場の置苗での本病の発生は認めていない。

[発生好適条件]

気温 20～25℃で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間濡れるような条件のとき、一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は本病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して適切に処分する。
- ② 常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。
- ③ 本病は例年6月下旬から発生する。粒剤による本田防除の適期は初発前～初発時なので、適期を逃さずに防除する。
- ④ 粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。

※ 防除所 HP にて6月より BLASTAM(アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム) による葉いもちの感染好適日の出現状況を随時掲載する予定ですのでご参照ください。

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、葉における発病率（本年値 0.04%、平年値 0.14%）は平年よりやや低く、果実における発病率（本年値 0.07%、平年値 0.30%）は平年よりやや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 一部圃場で多発生を認めているので注意する。
- ② 効果的に防除するためには、二次伝染源の除去が重要であり、発病した葉および果実は見つけ次第除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、発病部位を除去した後にを行うと防除効果が高い。
- ④ 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ（第二世代幼虫）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並～やや早い	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、第一世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から、平年並～やや早いと予測される。
- ② 5月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、小美玉市で平年より多く、笠間市、土浦市、筑西で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、第二世代幼虫が発生するため、次ページの防除所レポートを参考に適期防除に努める。
- ② 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(ナシ 続き)

防除所レポート [ナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期は、**第一世代成虫の誘殺数がピークに達した日の7～9日後**である。
- ② 各地点の第一世代成虫の誘殺最盛期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測し、おおむね平年並からやや早い。
- ③ 表中のかすみがうら市、土浦市、筑西市(旧下館市)については、今後、病害虫防除所ホームページで情報を随時更新するので参考にする。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第二世代幼虫の予測防除適期

地点	第二世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾		
笠間市(旧友部町)	6月19日	～	6月22日
小美玉市	6月17日	～	6月21日
石岡市	6月12日	～	6月16日
かすみがうら市	6月12日	～	6月16日
土浦市	6月12日	～	6月16日
筑西市(旧下館市)	6月18日	～	6月22日
筑西市(旧関城町)	6月15日	～	6月18日

1) 予測した第一世代成虫の誘殺ピークの7～9日後とした(5月26日現在)。

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 本年2月上旬の越冬量調査における成虫の越冬数(本年値0.4頭、平年値2.3頭)は平年よりやや少なく、越冬地点率(本年値29%、平年値38%)は平年よりやや低い。
- ② 5月第3半旬までの予察灯への総誘殺数は、かすみがうら市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 笠間市におけるカメムシ類に吸汁されたサクラ果実の割合は5月下旬で100%となっており、今後、餌を求めて果樹園へ飛来する可能性があるので注意する。
- ② 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり、果樹園への飛来が増加するので注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には、活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ③ 多目的防災網(6mm目または9mmクロス目等)はカメムシ類の園内への侵入を防ぐため、被害軽減に有効である。

夏ネギ

1. 黒斑病（葉枯病を含む）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、発病度^{*}（本年値 2.0、平年値 0.6）は平年よりやや高い～高く、発生地点率（本年値 23%、平年値 38%）は平年並である。

※発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 肥料切れや多肥は発生を助長するため、生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

サツマイモ基腐病に注意しましょう④

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中、地上部の茎葉は枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、発病株から周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。本県では、現在のところ本病の発生を確認しておりませんが、防除が難しく被害が拡大するおそれがあることから、発生を警戒しています。

基腐病対策の基本は、①圃場に病原菌を「持ち込まない」、②病原菌を圃場で「増やさない」、③病原菌を他の圃場に「広げない」ことです。

植え付け後に万が一発生した場合は、早期発見と適切な処理が重要となります。本病の拡大を防ぐため、以下の事に注意してください。

【植え付け後の早期発見のために】

～病原菌を圃場内で「増やさない」、他の圃場に「広げない」対策をしましょう！～

- ・万が一の発生に備え、作付けほ場ごとに使用した苗を追跡できるよう、苗床の場所を記録しましょう。
- ・発生を拡大させないためには早期発見が重要です。茎葉が繁茂すると発病株の発見が難しくなるため、茎葉が地上部を覆う前までの期間（発病株を見つけやすい時期）は、特に以下の観察を徹底しましょう。
 - ① 卷葉や株の萎縮
 - ② 葉の変色（赤変・黄変）
 - ③ 株元の茎の黒変
- ・汚染土を拡散させないよう、他のほ場へ行く前には、農機具や長靴についた土を良く落とし、きれいに洗浄しましょう。

※疑わしい症状が見られたら、至急、近くの地域農業改良普及センターまたは病虫害防除所にご連絡をお願いします。

（サツマイモ基腐病に注意！ 病虫害防除所 HP 掲載チラシ参照）



【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネミズゾウムシ	発生量: やや多い	5月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	イネドロオイムシ	発生量: 平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量: 平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
	べと病		
半促成ピーマン	うどんこ病	発生量: 平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
	斑点病		
	アザミウマ類	発生量: 平年並～やや多い	5月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	ハダニ類	発生量: 平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
夏ネギ	べと病	発生量: 平年並	5月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギアザミウマ		
	ネギハモグリバエ		

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 5月29日から6月28日)

気象庁(5月27日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	30	50
	降水量	関東甲信全域	30	40	30
	日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 5月29日(土曜日)から6月4日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年より高い確率50%

<2週目の予報> 6月5日(土曜日)から6月11日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 6月12日(土曜日)から6月25日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類* (FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。